

子孫の残し方

1. コカマキリ

オオカマキリのような重量感がない代わりに、小柄でスマート、華やかな感じがします。威嚇は格好よく、一人前に行ないます。個体密度が小さいため、あまり出会いません。地面を歩いていたり、低い位置にいることが多いので、その気になって視野を動かして探す必要があります。鎌の付いた前足の内側、白と黒のコントラスト



の模様が特徴的です。体色は黒っぽい

ものから薄いものまでいろいろありますが、前脚脛節の白黒斑は共通です。オオカマキリは緑色型が多く、コカマキリは反対に緑色型のものにはなかなかお目にかかれませぬ。

卵嚢は物の面に付ける習性なので、石や壁に張り付いて見つかります。オオカマキリのくし団子型とは産みつける環境が異なるため、探し方も変える必要があります。夜間、灯火へ飛来することもありますので、家の壁で見つかることがあります。卵嚢を付ける場所はどのような選択基準があるのでしょうか。オオカマキリが高い場所に付けている年は雪が多いなどといいますが、当てにならないようです。コカマキリはずっと低い位置です。日当たりも関係ありそうです。

鳥やスズメバチは餌として認識しているようで、食べられているのをみたことがあります。親も子もともに難に遭うようです。



2. ヤマノイモ

昔はヤマノイモのむかご採りは10月でしたが、近年は11月中旬まで可能となりました。葉が黄色くなったのを目当てに近づいて探します。

英語のyamは、マレー語のヤムが語源だそうです。この仲間は熱帯が分布の中心で、サトイモの仲間のタローイモと同様、食料として重要な植物となっています。ヤマイモとヤムイモ、音が似ていることは関係があるのでしょうか。ヤマノイモは最も北まで分布している種類で、寒い地方や高山には分布しません。



花が咲き、種子ができますが、繁殖の主力は葉の腋に付くむかごです。むかごは珠芽ともいい、茎に栄養を蓄えたもので、ジャガイモと同じです。つるに付いている状態で根を出しているものもあります。地上に落ちたものが翌年根とつるを伸ばし、生長します。栄養をもって早く葉を上方にもっていけるので、他の植物より有利なのです。

雌雄異株でどちらも葉腋に花穂をつけ、花が付かなかった方のつるの先端にむかごを付けます。親から離れた位置に子孫を残すための方法と思われる。しかし、カタツムリやネズミ等の餌となり、生き残りが難しい世界です。

